

神奈川県におけるイネ縞葉枯病と ヒメトビウンカの発生

宇田川 晃・近岡一郎・小林正伸・阿久津四良
(神奈川県農業総合研究所)

神奈川県では昭和58年にイネ縞葉枯病が多発したので、当所病虫科と病害虫防除所で行った過去10年間の縞葉枯病の発生とヒメトビウンカの発生及び保毒虫率に関する調査試験結果をとりまとめた。

調査方法

縞葉枯病の発生面積率は、発生予察事業でその年度の最終面積とし、甚、多、中、小の面積にそれぞれ4、3、2、1の指数を与えて発生度を求めた。ヒメトビウンカの誘殺状況は平塚市寺田縄の農総研予察灯で調査した。55年からヒメトビウンカの保毒状況を県下6～10地点について、原則として2～3月の老令幼虫を採集して、抗体感作赤血球凝集反応(日植防研作成)により検定した。

結果及び考察

イネ縞葉枯病の発生度は、49～53年の5年間と54～58年の5年間を比較すると明らかな増加傾向が認められる。ヒメトビウンカの誘殺数も同様であった。ヒメトビウンカの保毒虫の検定は調査年数が浅いが、54年のイネ縞葉枯病の多発を契機として上昇したと考えられる。57、58年の両年は低減傾向にあり、本病の発生度

第1表 イネ縞葉枯病とヒメトビウンカの発生、保毒状況

年	作付面積	縞葉枯病		ヒメトビウンカ	
		発生面積	発生度	誘殺数	保毒虫率
49	6,700 ^{ha}	132 ^{ha}	0.5	271	— %
50	6,616	145	0.5	311	—
51	6,558	54	0.2	17	—
52	6,271	1,293	7.7	101	—
53	6,250	459	1.8	53	—
54	6,221	2,166	9.7	808	—
55	6,361	2,126	10.1	172	10.8 ^(3月14日 7地点)
56	5,592	3,019	22.6	463	10.1 ^(3月10日 6地点)
57	5,207	2,390	17.6	307	8.1 ^(5月28日 7地点)
58	5,207	3,402	26.6	316	5.6 ^(2月25日 10地点)

注) 1. 発生度は甚、多、中、少の発生面積にそれぞれ4、3、2、1の指数を与えて計算した。
2. 誘殺数は農総研(平塚市)予察灯の年間総数。

とは結びつかないが、気象条件等を含めた検討が必要と思われ、今後も調査を続けたい。

Akira UDAGAWA, Ichiro CHIKAOKA, Masanobu KOBAYASHI and Siro AKUTSU: Occurrence of the rice stripe disease and the small brown planthopper in Kanagawa Prefecture.